

『アカウンティング演習 A』 課題

販売量・生産量が「利益の質」に与える影響の分析

志 村 正

一般に、利益とキャッシュ・フローにはギャップがある。つまり、利益が出たとしても、それが現金の純増加を意味しない。収益が現金収入（キャッシュ・インフロー）を伴わなかったり、費用が現金支出（キャッシュ・アウトフロー）を伴わなかったりするからである。そこで、本レポートでは、利益（経常利益－法人税等）と営業活動からのキャッシュ・フロー（営業キャッシュ・フロー）がどのような関係にあるのかを分析する。

営業キャッシュ・フローは営業利益を現金ベースで測定した金額と説明される。本演習では、営業キャッシュ・フローは次のようにして求められた。

当期純利益	×××
減価償却費	×××
売掛金増減高	×××（減少はプラス、増加はマイナス）
買掛金増減高	×××（増加はプラス、減少はマイナス）
商品・原材料の増減高	<u>×××</u> （減少はプラス、増加はマイナス）
キャッシュ・フローの増減高	<u>×××</u>

以上の要素のうち、売掛金の増減高と当期純利益に關係する販売量および在庫の増減と当期純利益に關係する生産量を変化させた時の利益と営業キャッシュ・フローの変化を取り上げて分析してみたい。

アクルーアル（accrual）という指標がある。これは、「会計発生高」と訳され、決算上の利益の「質」を見極める指標である。会計上の利益とキャッシュ・フローの差額で計算され、利益が現金収支を伴う質の高い利益かどうかを検証するために用いられる。一般には、次の式で計算される。

$$\begin{aligned} \text{アクルーアル} &= \text{特別損益を除く税引後利益} - \text{営業キャッシュ・フロー} \quad \text{または} \\ &= \text{経常利益} - \text{法人税等} - \text{営業キャッシュ・フロー} \end{aligned}$$

アクルーアルが低い企業は現金収入の裏付けのある健全な利益を上げており、アクルーアルが高い企業は利益の質が低い企業である。質の高い利益を上げる企業は通常はマイナスであり、プラス傾向が続くと現金創出が遅れていると判断できる。

このアクルーアル指標は不透明な会計処理や粉飾決算を見抜くのに、また投資家が投資先銘柄を選定するために用いているという*。一般に、アクルーアルが低い銘柄は投資効果が高いと言われる。

*公認会計士の高田貞芳氏はアクルーアルが粉飾決算を見抜く指標であることは決してないと述べている。

(1)販売量が利益の質に与える影響

まず、販売量が利益の質に与える影響を分析してみる。

販売量以外の基礎データは次の通りとする。

購入量 150 購入価格 80 生産量 150 販売価格 240

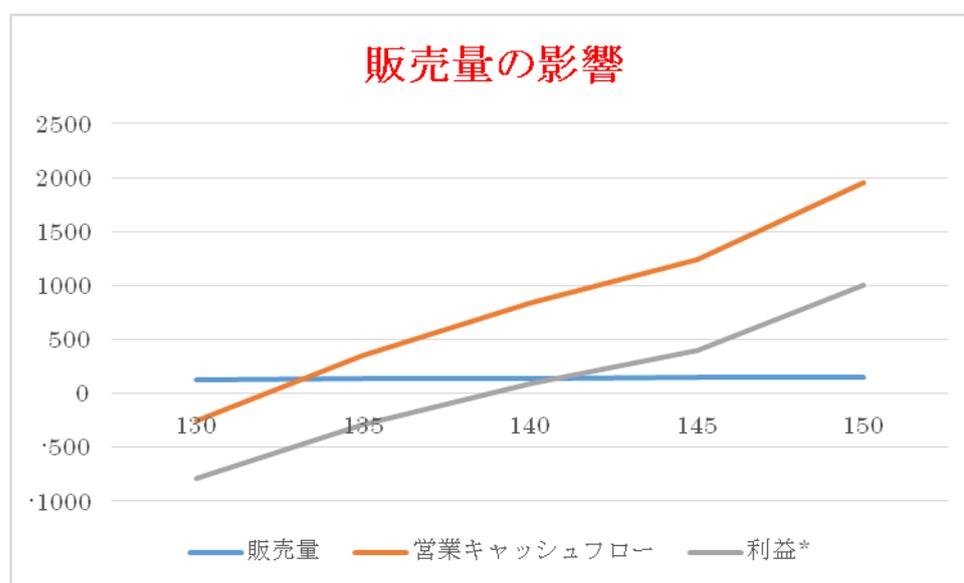
販売促進費 15 原料市場調査 1 製品市場調査 1 セグメント調査 3

以上の時、販売量を130から150まで5本ずつ増加させた時の営業利益と営業キャッシュ・フローの変化は次のようになった。

販売量	130	135	140	145	150
営業キャッシュフロー	¥-250	¥350	¥837	¥1,244	¥1,952
利益*	¥-790	¥-292	¥94	¥399	¥1,005
差額:アクル―アル	¥-540	¥-642	¥-743	¥-845	¥-947

*経常利益－法人税等

これらをグラフにしたものは次のようになる。



以上の分析結果により、いずれの販売量においてもアクル―アルはマイナスであるが、販売量が増加していくにつれてアクル―アルの値が大きくなり、利益の質が落ちていることが理解できる。つまり、現金の裏付けを伴わない利益となっている。

(2)生産量が利益の質に与える影響

今度は、生産量の変化が利益の質に与える影響を分析してみる。

生産量以外の基礎データは次の通りとする。

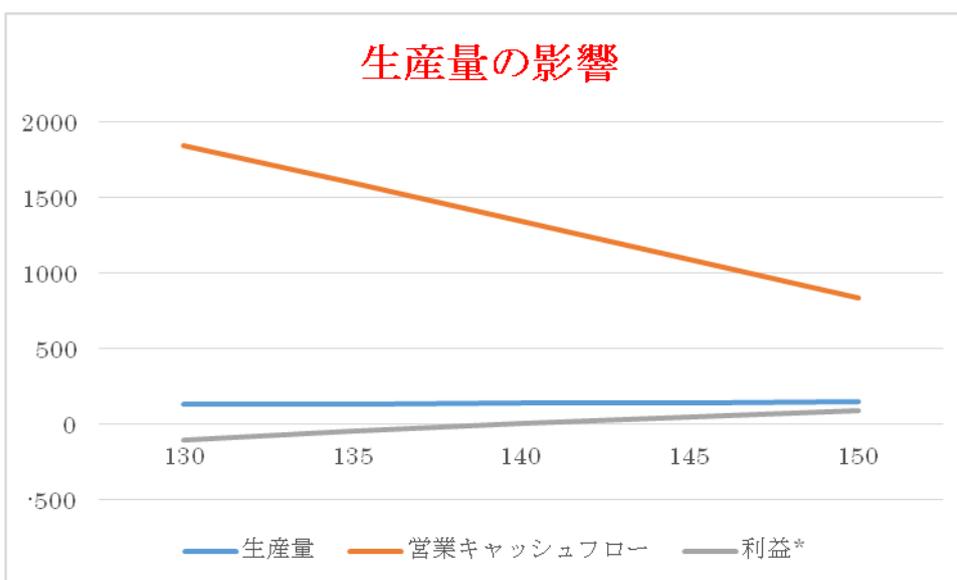
購入量 150 購入価格 80 販売量 140 販売価格 240

販売促進費 15 原料市場調査 1 製品市場調査 1 セグメント調査 3

以上の時、生産量を 130 から 150 まで 5 本ずつ増加させた時の（経常利益－法人税等）と営業キャッシュ・フローの変化は次のような結果になった。

生産量	130	135	140	145	150
営業キャッシュフロー	¥1,850	¥1,600	¥1,344	¥1,089	¥837
利益*	¥-100	¥-40	¥8	¥52	¥94
差額:アクルーアル	¥-1,950	¥-1,640	¥-1,336	¥-1,037	¥-743

これらをグラフにしたものは次のようになる。



以上の分析結果により、いずれの生産量でもマイナスであるが、生産量を増加させて行くにつれてアクルーアルの値が小さくなり、利益の質が高まったことが理解できる。つまり、現金の裏付けを伴った良質の利益となっている。

本レポートでは、アクルーアルという指標を用いて、販売量と生産量が利益の質に与える影響を分析してきた。その結果、両者ではまったく反対の結果が出てきた。すなわち、販売量が増加するにつれてアクルーアルのマイナスが拡大して行き、利益に現金の裏付けが希薄となっていく。これに対して、生産量については、生産量の増加に伴って、アクルーアルのマイナスは小さくなって行き、現金の裏付けを伴った良質の現金を生み出すことが結論づけられた。

【参考文献】

- ・『日本経済新聞』2015年7月7日付け；2015年7月23日付け。
- ・高田貞芳氏ホームページより http://cpa-factory.at.webry.info/201507/article_16.html
(アクセス日；2016年7月8日)